



22062037

**JAPANESE A2 – HIGHER LEVEL – PAPER 1**  
**JAPONAIS A2 – NIVEAU SUPÉRIEUR – ÉPREUVE 1**  
**JAPONÉS A2 – NIVEL SUPERIOR – PRUEBA 1**

Monday 22 May 2006 (morning)  
Lundi 22 mai 2006 (matin)  
Lunes 22 de mayo de 2006 (mañana)

2 hours / 2 heures / 2 horas

---

**INSTRUCTIONS TO CANDIDATES**

- Do not open this examination paper until instructed to do so.
- Section A consists of two passages for comparative commentary.
- Section B consists of two passages for comparative commentary.
- Choose either Section A or Section B. Write one comparative commentary.

**INSTRUCTIONS DESTINÉES AUX CANDIDATS**

- N'ouvrez pas cette épreuve avant d'y être autorisé(e).
- La section A comporte deux passages à commenter.
- La section B comporte deux passages à commenter.
- Choisissez soit la section A, soit la section B. Écrivez un commentaire comparatif.

**INSTRUCCIONES PARA LOS ALUMNOS**

- No abra esta prueba hasta que se lo autoricen.
- En la Sección A hay dos fragmentos para comentar.
- En la Sección B hay dos fragmentos para comentar.
- Elija la Sección A o la Sección B. Escriba un comentario comparativo.

問題 A か問題 B のどちらかを選び、答えなさい。

### 問題 A

次の二つの文章について、共通点・相違点・主題を分析し比較しなさい。またその際、筆者が自分の考えを伝えるために用いている文の構成・語彙・言葉の象徴するもの・文体などの要素を考慮に入れなさい。

テキスト 1 (a)

#### 前しか見ない

なぜ舞台美術に魅せられたのですか。公演が終わると消えてなくなるのは寂しいとはおかんがえになりませんか。

人間は生きていれば、誰でもいつか死ぬものですね。舞台も消えるからいいんです。花火はパーンと上がって、一瞬で消えるから美しい。花火が何十年も空にへばりついていたら、気味が悪いじゃない。

- 5 私はね、物をとっておくのに執着しやくちやくしないんです。舞台美術が好きな理由もそれかもしれない。ラク（千秋楽）が終われば、皆なくなっちゃうから。舞台芸術は公演中の数日間だけ命輝くもの。その輝く瞬間に、いかに人を感動させることが出来るかが大切なんです。だから、作品がなくなってしまうのは、別に寂しくありません。もし残っていたら、かえって憂うれうつですよ。

これまでに、舞台美術でいくつもの賞を取っておられますね。

- 10 私はね、前しか見ないんです。過去は振り返らないたちなんです。振り返って、気をもんでみたってしょうがない。過去について語るのは、私にとって、気の乗らないわずらわしいことなの。

それより、これからやろうとしている作品のことで頭がいっぱいで、やろうと決めたらすぐやらないと駄目な性格なんです。で、実現すべく努力する。ああでもない、こうでもないって、あんまりくよくよ悩まない。少し無理かなと思うことでもやっちゃう。そうすると、人間、できるものです。

（「人間発見」朝倉撰（舞台美術家）へのインタビュー。聞き手は編集委員。一部変更。日本経済新聞 2003年7月28日）

## テキスト1 (b)

時間が来た。(花火の)点火だ！

玉は筒口で、1回転し、勢いよく筒から飛び出していく。夜空高く、ヒューンとうなって駆けのぼると、玉の外側がまず割れて、左、右と銀色の枝葉を鮮やかに中空に描き分け、音のはじける。その枝葉の消えないうちに、さらに高く上がった玉の中心部が、大きく金色の菊の花を咲かせる。玉のは  
5 たらきはそれで終わったのではない。核になる部分は、さらに高くのぼり詰めて、もう一度どっと大きく銀色の菊を開かせる。色は明るく冴え、吹雪のように散って落ちる花卉がまぶしい。

高杉氏の苦心の作、「二度咲き千輪」は成功した。ひと息つくと、また一発。「懸崖づくり」で、銀色の芯を持つ紫の菊が、華麗に乱れ咲く。夜もろくすっぽ寝ずに工夫した甲斐があったと、この一瞬に、なんとも形容できないよろこびを高杉氏は噛みしめている。見物客の歓声の高まりが遠くから伝  
10 わってくる。それは一瞬に消えるものを惜しむ嘆声の渦巻きでもある。だが、一瞬に消えるからこそ、花火は何物にもまして、見る者のところをとらえるのだ。続いて、高杉氏は打ち上げる。赤、青、黄、銀、四色のスターメインが、連続して華やかにはじけ咲く。光の宝石の群れはたちまち闇の底に砕け散る。美は見たものの胸のうちに詩情を刻み付けて、いさぎよく無に還る。そしてほとんどすべての人がその作者を知らずに立ち去る。ヘルメットをかぶり、丸玉屋の印袴纏を着て、打ち上げ筒の傍、  
15 地面を匍いまわっていた男のことなど、誰も考えてもみずに、花火の美しさだけを話題にしながら人々は去っていく。それでよしい。この満足感に比べれば、取るに足りないことだ、と高杉氏は思う。彼のひびだらけの黒い手は、そっと焼けた筒を撫でている………………。 (嶋岡晨「花火師 高杉一美」『色』収録 作品社 1983年)

(注)

嶋岡晨 (しまおかしん) (1932-) 詩人。代表作に『偶像』『産卵』がある。

懸崖……切り立ったような崖 (がけ)。ここでは、花火の型。

印袴纏 (しるしばんてん) ……背中などに屋号 (商家・俳優の家のしるし) を染め抜いた袴纏。羽織のような上着で、職人の中で用いることが多い。

問題 B

次の二つの文章について、共通点・相違点・主題を分析し、比較しなさい。またその際、筆者が自分の考えを伝えるために用いている文の構成・語彙・言葉の象徴するもの・文体などの要素を考慮に入れなさい。

テキスト 2 (a)

木

木は黙っているから好きだ  
木は歩いたり走ったりしないから好きだ  
木は愛とか正義とかわめかないから好きだ

ほんとうにそうか

5 ほんとうにそうなのか

見る人が見たら

木はささやいているのだ。ゆったりと静かな声で  
木は歩いているのだ 空に向かって  
木は稲妻のごとく走っているのだ 地の下へ

10 木はたしかにわめかないが

木は  
愛そのものだ それでなかったら小鳥が飛んできて  
枝にとまるはずがない  
正義そのものだ それでなかったら地下水を根から吸い上げて

15 空にかえすはずがない

若木

老樹

ひとつとして同じ木がない

ひとつとして同じ星の光りのなかで

20 目ざめている木はない

木

ぼくはきみのことが大好きだ (田村隆一「水半球」『詩集1977-1986』)

(注) 田村隆一(1923-1998) 詩人。1947年、『荒地』を創刊。詩集に『四千の日と夜』『言葉のない世界』がある。

## テキスト 2 (b)

5 - - - ある日、弟棟梁の榎二郎さんが立ち寄ってくれた。私のいるところは、ちょうど榎二郎さんの出勤路の途中にあるので、時折訪ねてくれる。もの静かな人で、話も静かだが気さくに、これまでこなしてきた仕事のことなど聞かせてくれた。その日は来たときから少し調子が重かったが、やがて渋りながら、今日の話は、どうも縁起のいい話じゃないと思うので、しょうか、しまいかと考えめぐねているのだが、と言う。なんの話かと聞いたところ「木の死んだののことです」。

10 どんな良い材料、強い材料であろうと木には木の寿命があり、寿命が尽きれば死ぬ。寿命を使い尽くして死んだ木の姿は、生きている木にはない、また別の貴さ、安らかさがある、榎二郎さんはたまらなく心惹かれるという。もし縁起を構わないのなら、木の死んだのも見ておいてもらいたい、生きている木ばかり見せておいたのでは、片落ちなわけで、生きても死んでも、木というものは立派だ、と知っておいてもらいたいし、一度それを見ておけば、きったあなたの何かの役に立つと思う、と言う。なんという心の深さだろうと、打たれてしまって、ただありがとうと言うばかりしかできなかった。

15 翌日、早速見せてもらった。檜と杉と松だった。一目見て、これは全く寿命の限りを生きつくして、しかし、はっきり檜は檜、杉は杉の面影を残して終わっている、とうなずけた。生きて役立っていたときの梁や力をすっかり消して、そのかわりに気安げになんのこだわりもなく鎮まっているので、自然の寿命が尽きると言うのは、こういう安息の雰囲気醸すものなのだろうかと思った。何かは知らず安堵感のようなものもあり、名残惜しさのようなものもあり、けれども、ちっともべとつかない、質のいい感動があった。しかもなんとなくわかった気のすることがあった。それはかつて西岡三棟梁が、それぞれいちばんはじめに私に教えてくれた「木は生きている」ということの滞りが解けたのである。理屈には合わないが、生きつくしたのを見たら、生きているということが鮮明になっらしい。

(幸田文「材のいのち」、『木』1992年)

(注)

幸田文(1904-1990) 小説家・随筆家。幸田露伴の次女。代表作に『流れる』『おとうと』などがある。棟梁(とうりょう)……大工のかしら。西岡三棟梁は、法隆寺などの古寺の再建や修理をする宮大工の家系で、西岡家の三人兄弟を指す。